

頼山陽の「日本外史」をめぐるて (三)

土屋 博

(口語譯の附きたる書籍)

六十三 「日本外史新釋 全十二冊」 頼襄子成原著、久保天隨釋義

(博文館藏版、明治四十年より四十一年にかけて出版、各定價金參拾錢、第一卷二三〇頁より第十二卷六〇頁まで)

漢學の大家、久保天隨先生(臺北帝大教授)による珠玉の金字塔とも稱すべきもの。日本外史を學ぶ者にとりては必携の書籍なり。



六十四 「少年叢書漢文學講義 日本外史講義 全四冊」

(興文社、大正二年より四年まで順次出版、四六二頁＋四七八頁＋四八六頁＋四七二頁) 久保天隨版に次ぐ、貴重なる全譯の書籍なり。

六十五 「繪本 日本外史 第五冊」 頼山陽原著、大町桂月譯述

(博文館藏版、大正七年刊、大正九年改正定價金壹圓貳拾錢、二一〇頁)

六十六 「日本外史講義」 頼襄子成原著、興文社編輯所講義

(興文社、大正十四年刊、定價金七圓、九三九頁＋九五八頁)

函入、天金、立派なる製本、二分冊。漢文學叢書の第一編及び第二編。縮刷版なれば、携帶には便利なれど、字の大きさは豆粒の如し。

六十七 「漢文講座」

(弘道館、大正十五年十月第一卷、十一月第二卷、・昭和二年十二月第十五卷まで)

日本外史については、東京高等學校教授頼成一先生による講義。ついで乍ら他の講師陣も豪華なること垂涎の極みなり。

孝經・元曲(鹽谷溫)、論語・中庸(宇野哲人)、大學(諸橋轍次)、孟子(内野臺嶺)、小學(飯田傳二)、老子(小柳司氣太)、莊子(坂井喚三)、荀子(山口察常)、韓非子(平澤

東貫)、左傳(飯島忠夫)、十八史略(鹽野新次郎)、文章規範(高成田忠風)、古文眞寶(近藤正治)、唐詩選(佐久節)、白樂天詩選(小野機太郎)、本朝名家詩文(福原龍藏)、時文(竹田復)、晉唐小説(内田泉之助)、史記(中村久四郎)。

六十八「日本外史解義 上中下」頼成一著

(弘道館、昭和六年刊、定價金七圓五拾錢、九五六頁十一〇八〇頁十一〇一八頁)
著者は一高教授、頼山陽は高祖父に當る。

著者後記に曰く、流布せられたる註釋書・語釋書の類、皆良書には違ひなけれど、漢文の稍流行したる時代の發行なれば、ぎこち無き氣がして讀むうちに自然倦怠を生ぜしむる恐れあり、づつと碎けて通俗的なる解釋を施して見んと企てたるがこの解義なりと。

日本外史全文の口語譯書籍の最も權威ある決定版、勞作といふべし。一家に一揃ひ備ふる丈の価値あり。

六十九「日本外史新釋 全五卷」頼成一著

(弘道館、昭和六年刊、非賣品)

大禮記念の昭和漢文叢書としての發刊。

同一著者、同一出版社の「日本外史解義」とほぼ同一内容の如くに見ゆ。

七十「日本外史詳解」磯野貞二郎著

(健文社、昭和五年廿二版、定價壹圓五拾錢、本文七〇六頁十年表・索引)

初版は昭和四年。著者、例言に曰く、「今日世に行はれてゐる中等教科書としての外史鈔本は、その何れの發行を問はず、悉く本書一卷に網羅されてゐる。これ本書は、外史の世道人心に益するものは、紙數の制限を排して、務めて多く採録したからである。」と。

なほ、本書は論贊部分には觸れず、「日本外史論文詳解」なる別の一冊を準備する豫定とあり。(實現したるかは不明。)

七十一「頼山陽集」大日本思想全集刊行會

(先進社、昭和六年刊、五三三頁)

古書價格四百圓也。函入。日本外史論贊、新策、山陽文集、山陽書翰集、日本政記、日本樂府の現代語譯文を収録し、殊の外重寶す。頼山陽集は四七八頁迄にて、附録として、山縣大貳・竹内式部集も收む。

七十二「日本外史論文詳解」坂口利夫著

(大同館、昭和拾年刊、正價金壹圓五拾錢、三一二頁)

はしがきに曰く、「私は何時日本外史を讀んでも、山陽の最も意を注いだのは十九篇の論文であると思ふ。故に各傳を讀まないで、この史論だけを讀んでも外史の本旨には觸れ得

ることを疑はない。」と。文檢漢文科の口述試験では、四書の註と十八史略を除いては、外史の論文がよく出る由。

七十三「日本外史・言志四録 新釋 附近古史談・先哲叢談」中等漢文研究協會編
(莊文社、昭和十一年刊、定價金壹圓八拾錢、四七七頁)

函入。重く美しき書籍。通釋部分を一讀せば、昔の中學生の教養の肝の部分をも身につけることを得。

七十四「受験學習 十八史略・日本外史・近古史談 解釋」兒玉尊臣著

(駿々堂、昭和十一年刊、定價金壹圓、四八〇頁)

古書價格四千圓也。緒言より、「解釋の文章は最も平易簡明を旨とし何人にも分り易く且つ讀み易からしめん事に意を用ひたから、むつかしい本文と對照して必ずや一讀釋然たるものがあると信ずる」と。頁の配分は、十八史略百三十六頁、日本外史二百三十四頁、近古史談百十頁なり。

七十五「詳解 日本外史楠氏篇」宮下幸平著、中山久四郎監修

(芳文堂、昭和十二年刊、定價金四拾錢、一三四頁)

著者、序に曰く、「外史二十二卷中、楠氏篇に至つては、山陽烈々の氣魄と、楠氏盡忠の精神と相俟つて、紙上に勤王、尊王の大文章と爲り、讀者の胸を強く衝く。其の迫力の強大なる、誰か感奮興起しない者があらうか。」と。

七十六「最も徹底せる 日本外史精解」文學士青木亮義著

(東江堂、昭和十三年四版、定價金壹圓貳拾錢、三四五頁)

初版は昭和十二年。緒言によれば、中等諸學校漢文科教科書に採録せられたる大部分は網羅せられたる由。なほ、論贊部分はすべて割愛せらる。

七十七「日本外史新釋」島田鈞一著

(有精堂、昭和十四年七版、定價金貳圓拾錢、六二七頁)

古書價格二千圓也。初版は昭和十二年。三度目の購入なり。(昭和十五年版、昭和三十五年版に次ぐ)。著者島田鈞一は第一高等學校教授なり。

(昭和十五年八版も所有すれど、保存状態稍悪し。)

(昭和二十九年に復刻せられ、昭和三十五年六版は所有)

七十八「日本外史新解」國語漢文研究會編、簡野道明先生閱

(明治書院、昭和十六年三月二十一版、定價金貳圓、五八〇頁)

初版は昭和九年。例言に曰く、「日本外史二十二卷は、賴山陽が大權の武門に移り、皇室の式微を嘆いて、刻苦勵精、二十餘年の心血を注いで成つた大著で、源平二氏から筆を起し、徳川氏に至るまでの治亂興廢を詳にし、皇室を尊び、忠奸を辨じ、國體の精華を發揮

したのは勿論、文章も亦雄健で精采があるから、読者をして知らず識らず、尊皇賤霸の大義を明かにし、忠君愛國の志氣を鼓舞振作せしむるに足るものがある」と。

(昭和十七年十月十九版も所有。戦時に入り、紙質は劣化。昭和十六年の二十一版とは矛盾する十九版の表記なり。)

(戦後の昭和四十四年復刊版も所有。定価金九百八拾圓。)

七十九「日本外史精解」重野篤二郎著

(白帝社、昭和十六年刊、定価貳圓五拾錢、本文七二九頁)

昭和四年版「日本外史詳解」と類似の書。判型大きくなり、紙の質は辭書の如くに薄くなれり。

八十「日本外史 源氏と平家の卷」眞鍋元之譯

(桃源選書、昭和四十六年刊、定価五百五十圓、二八五頁)

譯舎は明治四十三年生れ、廣島高等師範國語漢文科中退。

八十一「頼山陽選集六 頼山陽日本外史」安藤英男著

(近藤出版社、昭和五十七年刊、定価三千圓、二九三頁)

はしがきによらば、幕末より明治にかけて知識人の總數、つまり漢文人口は三、四十萬と推定せられ、日本外史の發行部數は大体それに見合ふ由。本書には十九の論贊部分すべて収録せらる。冒頭に頼山陽自筆稿本の寫眞、卷末には原本の論贊全文の寫眞も含む。

八十二「中公バックス日本の名著二八 頼山陽」責任編輯頼惟勤

(中央公論社、昭和五十九年刊、定価千二百圓、四六六頁)

日本外史主要部分の口語譯を収録して居り、現代人にとりては極めて有用。定本は昭和六年頼成一著「日本外史解義」なれば、間違ひ無し。なほ、冒頭に頼惟勤氏による五十頁に及ぶ「頼山陽と日本外史」なる解説あり、初學者にとり恰好の外史入門となれり。また、折り込み附録には中村眞一郎の「文雅の人、山陽」なるエッセイあり、このところ我が國風潮に右傾化の懸念ありとし、尊敬すべき山陽嫌ひの人たちの例として、夏目漱石、永井荷風を擧げてゐることに注目すべし。

八十三「日本外史 幕末のベストセラーを超現代語譯で讀む」長尾剛譯

(PHP研究所、平成二十二年刊、定価本体千三百圓＋税、二四五頁)

(日本外史を讀む爲の参考書)

八十四「日本外史質問録」松山喜輔編輯

(明治九年刊、和綴)

古書價格二百圓也。たとへば、「白少將樂翁書」のうち「樂翁」につきては、「姓源名定信稱松平越中守居陸奥白川郡白川食十一萬石」と。

八十五「日本外史論文講義 全」菊地先生講義

（東京法木書屋、明治廿六年改正三版、定價貳拾錢、二〇一頁）

初版明治廿五年、内務省免許。扉に「二等賞賞典」と墨書せらる。「明治廿七年四月一日宗道村外五ヶ村組合高木小學校より」の文字あり。

講義は故菊地翁口授、新橋牧之助筆記。講義の實況なれば臨場感あるも、カタカナ表記なれば讀み辛し。

八十六「日本外史論文講義」河村北溟講述

（作人館、明治三十二年九版、二一六頁）

初版は明治二十七年。北溟によらば、本講義録はもと家塾の子弟に對し日々教授せし處の講演筆記のつもりつもりて一卷となれるを淨書の上印刷に附し以て同志の諸君に頒ちたる由。

八十七「論文日本外史講義」富本長洲先生講述

（日新義塾藏版、明治卅二年五刷、二四四頁）

初版は明治二十七年。問答式の書にて、一問目は「此の書を以て外史と名く、其義は如何」なり。

八十八「日本外史論文講義 全」片岡潛夫講述

（賣捌書肆田中宋榮堂・柳原積玉圃・中川玉成堂、明治卅二年六版、一六〇頁）

初版は明治廿九年。古書價格二百圓也。例言に曰く、「本講義は元より塾子の便を計るを旨とせり。因て訓詁講義及び文法の別なく意見ある所は本文に拘はらず潛夫の持説を挿入し以て悟入開發の一助となせり」と。文法、講義、鼈頭訓話の構成は充實し、外史授業の經驗豊富なることを示す。

八十九「山陽外史 全」中川克一著

（至誠堂、明治四十四年刊、特製定價金八拾五錢、二九九頁）

日本外史讀法を含む。

九十「日本外史論文講義」池田蘆洲講述

白表紙に和綴。本文三一九頁。古書價格二百圓也。

九十一「頼山陽の日本外史論贊」大町桂月著

（敬文館、大正四年刊、定價金貳拾五錢、一八九頁）

古書價格三千圓也。名著梗概及評論シリーズの一冊。「我が國文學史上の産物としては、所謂國文を以て綴られたるもの大部を占む。併しながらその多く讀まれし點より云へば、

國文は遙に漢文の下位にあり。我が國の子弟は、自國の古事記を讀まずして他國の論語を讀みたり。四書五經を中心として、漢文は我が國民の教育課程なりし也。」と。

九十二「建武中興史論」中野正剛遺著

(正剛會、昭和二十八年刊、定價二百五十圓、三一二頁)

序より、最も深刻に日本人の精神に觸るる部分を日本外史の中より抽出し、建武の中興を論じたし、と。昭和十八年世田谷區砧村の振東塾に於ける講演の速記録なれば、讀み易し。

(令和四年一月四日受附)